

今や「はしか」は大人の病気です

平成 30 年 7 月放送

安藤 徹

この春、沖縄県を中心に、百人以上の麻疹(ましん)患者が発症し、話題になりました。昔から「麻疹(ましん)」は「はしか」と言われ、よく知られた病気ですが、実は「はしか」の流行は、時代の変化とともに大きく変わってきています。

昔、「はしか」は、「命定め(いのちさだめ)」と言われ、死亡率(しばうりつ)も高く、失明(しつめい)などの後遺症(こういしょう)も恐れられた病気でした。一回感染すればと二度は罹(かか)らない「二度なし病」と知られていました。江戸時代では、およそ二三十年(にさんじゅうねん)毎(ごと)に猛烈な大流行を繰り返し、その頃は子どもだけでなく大人も罹(かか)ることが多く、幕末の流行では、江戸だけで二十万人以上の死者が出たと言われています。その後、明治以降は人口が増加し、人の往来が頻繁になると、全国で継続的に流行するようになり、主に子どもが罹(かか)る病気とみなされました。昭和四十一年からワクチン接種が始まると、徐々に流行は小さくなってきましたが、ワクチン接種率が低いこともあり、その効果は不十分でした。しか



し、二十一世紀になって、麻疹(ましん)排除(はいじょ)が国の目標となり、平成十九年から、MR ワクチンの二回接種が始まり、そして中・高校生にも臨時接種を行うことにより、2015 年には、我が国も「麻疹排除国」として、世界的に認められるようになりました。

では、なぜ今、「はしか」の流行がニュースになるのでしょうか。日本の周辺諸国、中国や東南アジアではまだ「はしか」は当たり前流行しています。またヨーロッパでも、再び麻疹流行の兆(きざし)がみられています。海外へ出かける日本人も年間千七百万人を超え、海外から日本に来られる外国人旅行者は、二千七百万人を超えようとしています。海外で麻疹に感染し、帰国後に発症する人、また外国人旅行者が自国で感染し、日本国内に持ち込むケースが続いています。そして、最近「は

しか」に罹る人は、三十代・四十代の方々が半数以上を占めています。なぜなら、ご年配の方々は子どもの頃に罹ったことが多く、強力な自然免疫を持っていますし、20代より若い世代は手厚いワクチン接種により十分な免疫を持っているため、たとえウイルスが感染しても、発症を防ぐことができるのです。しかし、その中間の三十代・四十代の方々には麻疹に対する免疫が弱い人が多いため「はしか」に感染し、発症してしまいます。

麻疹ウイルスを抑(おさ)える薬はありません。ワクチン接種が感染を防ぐ唯一の方法です。まだワクチンを接種していないお子さんはワクチンをしましょう。一歳になったら必ず定期(ていき)接種(せっしゅ)をし、小学校へ上がる前にもう一回忘れずに打ちましょう。流行(りゅうこう)国(こく)へ出張や旅行される方や、医療関係者や、子どもたちに接する機会の多い学校の先生や保育士さん、とくに三十代から四十代の方々は、まず麻疹に対する免疫力が充分あるか検査して、免疫が足りない場合はワクチンの接種をお勧めします。ワクチンの製造には長い時間と費用を必要とします。貴重なワクチンを無駄にしないため、かかりつけのお医者さんに、計画的なワクチン接種を御相談してください。